――目　次――

1　決戦の大地　003

2　妻との再会　015

3　竜の助言　032

4　夜の訪問　039

5　他の男の名前　062

6　邪竜と親友、共鳴する　076

7　孕まされる時　098

8　エピローグ　112

※この作品はフィクションです。
実在の人物や団体などとは関係ありません。

あの時の決断をやり直せるのなら、己の腕が切り落とされてもやり直すだろう。
それほどあの時の私の決断は間違っていた――

1　決戦の大地

風が荒れ狂っていた。

神殿で授(さず)けられた加護がなければあっという間に吹き飛ばされていただろう。

そんな暴風吹き荒れる大地でギイは奥歯を噛みしめた。目の前にそびえ立つ巨大な生きものを睨む。

竜だ。

その鱗は黒く輝き、翼は多くの嵐を孕んでいる。

大地をひしゃげるほど強大な爪の近くには仲間達の死体がいくつも転がっている。

戦い始めてからすでに半日と五日。

その巨体は小揺るぎもしない。

近隣の国から駆り出された兵士の多くが死に、前線から遠く離れた地では今も各国の王たちが互いの欲を牽制しあい、遅々として進まぬ会議をひらいている。
（もう限界だ……）
前線が保てなくなればこの黒い竜は進撃を開始し、大陸全土は闇に覆われるだろう。
人が住めなくなる時代がやってくる。
そのなかにはもちろんギイの最愛の妻、アリスが待つ領地も含まれている。
「連中、前線を支援する気もなくなってやがる。こりゃあ、まずいですよ！」
腹心のベルトランが風に吹き飛ばされないよう、腰をかがめて近づいてきた。
「どいつもこいつも保身に走っているわけか」
ここまで決断が遅れているのには理由がある。
――黒き災いの首を断ちし者、その身悪徳にまみれていれば必ず業火に身を焼かれ、命尽きるまで呪われるであろう。

以前にもこの黒き竜は現われ、人の手によって討ち滅ぼされてきた。
しかしその首を切り落としたものは皆呪われた。
ある者は親友に裏切られ、またある者は王の座を追われ、最期は古びた廃墟で飢えたまま死んだ。
なんでも奴を殺したものは今までの己の素行が呪いとなって降りかかるそうだ。
誰だって幸せに暮らしたい。
自ら呪われに行く馬鹿などいない。
だがそんな保身のために、今も着々と仲間たちの屍は積み重なっていた。悲鳴と怒号が重なり合って、戦場に響きわたる。
こんな理不尽がどこにある。
ギイは深く息を吸い込むと、覚悟を決めた。
握っていた大剣を見つめ、白く輝く刃の向こうに妻の笑顔を想像した。
（私はどうなろうと構わない。だが彼女は……彼女にだけは幸せになってほしい）

幸い、竜の呪いは首を切り落とした人間にしか効果がないと聞く。
愛する妻には波及しないはずだ――
嵐の向こうで猛り狂う竜を見つめる。
(死なばもろともだ)
生き残りたいという気持ちはあったが、それよりも目の前に積み重ねられていく遺体をこれ以上増やしたくないという気持ちがまさった。
幸いにも武器はある。
やりようも分かっている。
問題は己に呪いを受ける覚悟があるかどうか、というだけの話なのだ。
「おい、待てよ……ギイ」
ベルトランの瞳が不安に揺れる。
聡い腹心はいつだって自分の考えを一番に理解してくれる。
産まれてこの方、乳兄弟として育った弟分の彼は実によく自分に尽くしてくれた。

彼にも幸いが訪れますように……いや、私が彼に幸いを贈るのだ。
身の竦むほどの恐怖に苛まれながらも、ギイはベルトランのひげ面を叩いた。
相変わらず無精髭が濃い。
きっと自分も似たような顔だろう。そこへ勇気づけるようにほほ笑んだ。
「安心しろ。お前は私が守る。なにせ私は『真朱(まそほ)の騎士』だからな」
――それは苦難が現われた時、必ず人々を赤き血から遠ざける騎士の呼び名だった。
父や祖父も、そのまた祖父もずっとそうやって領地で暮らす人々を守ってきた。
隣国に攻め入られれば一番に馳せ参じ、悲しみにくれる人々の顔を上向かせる。
混じりけのない義侠心の塊こそがヴェルミオン家の誇る宝だった。
だからきっと彼も許してくれる。この行いを――
ベルトランの額にキスを贈り、口の中で詠唱する。

あっという間に半円の硬い結界が彼の周囲にできあがった。
これで内側から出ていくことはできない。
結界に気づいたベルトランの顔が驚愕に染まり、ついで涙と怒りでぐちゃぐちゃになった。
「行くな！　行ったらダメだ。なあ、死ににいくようなもんだぞ！　ふざけるな！　俺は許さないからな！」
声のかぎり叫ぶ乳兄弟の顔を目に焼き付けて、荒れ狂う黒竜に対峙する。
まだ生きている魔法部隊に魔術で指示を飛ばした。
必要なのは一瞬の隙だ。
奴の首元めがけてこの大剣を振り下ろせる時間が数秒あれば、こと足りる。
ふと妻の笑顔が頭に浮かんだ。
蜂蜜色の髪にころころと変わる表情に何度となく勇気と癒やしをもらった。
できれば彼女との子どもをこの腕に抱けたなら最高だっただろう。

だがそんな猶予(ゆうよ)はもうない。
黒竜の左右両翼に魔法部隊から放たれた光弾が襲いかかる。
目もくらむ爆発が無数に産まれた。巨大な羽の一枚一枚が白い火球で焼き切られ、翼をもいでいく。
が、その程度の攻撃でもがれるほど黒竜の翼はやわではなかった。
猛々しい羽は一枚も破れることはなく、爆発で産まれた煙をあっという間に散らしていく。
唯一変化したことといえば、彼が巨体をのけぞらせた事だった。
無防備にも巨大な顔が宙にさまよう。
灼熱の炎を溜め込んだ顎(あぎと)から火の光が弱まり、弱々しげにぐらつく。
(――今だ!)
口のなかで詠唱を終えた瞬間、ギイの身体は黒竜の真上に移動していた。

両手で大剣を握りしめ、かかげ持つ。狙うはのけぞった黒竜の柔らかい首先。
喉元は白く、そこだけ硬い鱗には覆われていない。
こちらの狙いに気づいた黒竜が灼熱の吐息を放ってくる。
だが力をためこんだ一撃ではない。
（神殿の加護でも耐えきれる……っ！）
透明な球体が薄い膜となって灼熱のブレスを防ぎきった。そして黒竜の顔が見えた。
（っ……なんて禍々しい……）
強大な牙がいくつも並び、猛々しい黒角が薄曇りの太陽と爆発の光で煌々と輝いている。その瞳は爛々と輝き、呪うに値する獲物が来たと悦んでいる。
心臓が縮みあがるほど猛烈に恐ろしい。
覚悟を決めたはずの唇から悲鳴とも咆吼ともつかない叫び声が飛び出した。
眼前に己が守ろうと誓った人々の顔が浮かんだ。

妻やベルトランに限らず、領地で暮らす人々、今までに父や祖父が助けた人々の顔が浮かんでは消えていく。
ギイは悲鳴を飲み込み、深く息を吸い込んだ。
（呪いたければ呪え！　だがお前の命ももらう――！）
そしてありったけの力と加護を乗せたまま大剣を振り下ろした。
断ちきった竜の首からどす黒い血が噴き出し、神殿の加護にひびが入る。全身がどろりとした赤黒い血しぶきにまみれた。それでもギイは握りしめた剣を放さなかった。
たとえ呪いにかかったとしても、この竜は殺す。
必ず討ち滅ぼす。
その一心で竜の鼓動が生き絶えるまで剣を握りしめた。
気づいた時には身体が地面にあった。着地の瞬間まで加護が生きていたのか、身体は五体満足だった。だが血を浴びたせいで朱色の鎧はどす黒く染まり、頬や髪も

べっとりと血で濡れていた。
竜の血はスライムにも似たどろっとした粘性の液体で、服の中にまで入り込んでいた。
ゆっくりと頭をめぐらすと、首を断たれた巨体が地面に沈んでいた。
その目は虚空を睨んでいたが、もう動くことはない。
竜は死んだのだ――
歓声が徐々に耳に入ってくる。はじめ鼓膜が破れたのかと思っていたが違ったらしい。
ゆっくりと聴覚が戻り、静寂だった世界があっという間に仲間達の声で満たされていく。
血まみれとなったギイの姿にも彼らは臆さず胴上げされた。
「英雄の再来だ」
「ヴェルミオンの騎士に幸あれ」

「真朱の騎士に竜殺しの栄誉を」
様々な褒め言葉が響きわたるなか、人垣をかき分けてベルトランが抱きついてきた。
「ばかやろう」
強い力で抱きしめられる。背中にまわされた手は震えている。
腹心であり親友でもある彼にひどい恐怖を味あわせてしまったとつくづく思い知らされた。
「……すまない」
「全くだ！」
彼は涙を隠そうともせず、何度も乱暴に背中を叩いてきた。
それはギイが生きていることを実感したいがゆえの行動だった。
竜を殺してもお前はまだちゃんと息をして、命をつないでいる――
そう伝えてくれる友の存在はかけがえのないものだった。

「……ありがとう」

彼の肩に頭をあずけた。土ぼこりにまみれた体でも、首筋から嗅ぎなれた彼の体臭が香って安心する。

安堵の息を吐くとベルトランがみじろいだが、もう指一本動かすのも億劫(おっくう)だった。

これからどんな呪いが降りかかるにせよ、災いは去ったのだ。

その安心感にギイは身をゆだねた。

2　妻との再会

王都に帰還したギイを待ち受けていたのは、人々からの歓声だった。国王から直接ねぎらいの言葉を贈られ、領地の拡大も申し込まれたが、丁重（ていちょう）に断った。

王都の権力争いにみずから参加するほど愚かではない。

それに今はどんな呪いがかけられたかも分からないのだ。帰還後さっそく神殿に調査を依頼したが、呪いとおぼしき魔力の痕跡は一切見当たらなかった。

国王や再会した人々の反応もごく自然で、呪いなど無かったと思えるほど、歓待の時間は続いた。

帰国して三日目の夕暮れ時、妻のアリスが王都に到着したと知らせをもらった。

その知らせを受けた時ほど嬉しいことはなかった。

腹心のベルトランに、にやつき顔でいじられたがそんな事も気にならないほど、彼女の到着はギイにとって待望だった。
王宮の華やかな応接室にベルトランとともに案内され、数週間ぶりに愛する妻の顔を見た。
「アリス！」
「あなた……！」
蜂蜜色の髪を揺らして、満面の笑みを浮かべて彼女が立ち上がる。
その細い身体を抱きしめようとした瞬間、彼女の視線が自分から微妙にそれていることに気がついた。
いや、確かにこちらへ向けられてはいる。
だが正確には自分の右隣にずっと彼女の視線が注がれていた。
そこには腹心のベルトランが控えていた。
一体なぜ――

彼女が瞳に涙をうるませて、近づいてくる。
「良かったわ。無事だったのね。とても心配したのよ。ベルトラン」
愛する妻はあろうことか、腹心の手をぎゅっと握り、潤(うる)む目で彼を見つめている。
「アリス……？」
これは一体なんの冗談だ？
今にも彼女の指をベルトランから引きはがしたい衝動に駆られたが、なんとか我慢した。
国を救った英雄が、たかだか妻が乳兄弟の手を握ったくらいで激昂(げっこう)する必要はない。
だがそれならばこの光景が起きている理由はなんだ？
「どうしたんだ。アリス……私だぞ」
彼女に手を差し出すと、冷たく払いのけられた。

「触らないで」
今までにない経験だった。
彼女はいつだってあたたかい微笑みを向けてくれる天使のような存在だった。できることならこのまま一生、第二夫人も持たず添い遂げたいと思っている。
彼女の気持ちも同じだったはずだ。
――ではこれはなんだ？
「穢(けが)らわしい。あなたがなぜここにいるのかしら？　ギイ・ヴェルミオン。顔も見たくないわ。そもそも私のベルトランをどうしてあんな血なまぐさい戦場に連れて行ったの。ほんと信じられない」
聞いたこともないほど冷淡な言葉だった。
アリスの敵愾心(てきがいしん)にみちみちた瞳、きゅっと引き締められた唇。
頭のてっぺんからつま先まで全身で『夫』である自分を拒否していた。

頭をひどく硬いものでぶん殴られた気分だ。
ちらりと彼女に手を握られている親友を見た。
産まれてからずっと一緒だった乳兄弟であり、腹心でもある男は彼女の手を振り払いもしない。
（私の妻の手を握っているのだぞ……。離れろ）
呆けた面をはたいてやりたかったが、いま目の前にはアリスがいる。
妻の前で腹心を罵倒する男になりたくなかった。
拳を爪が食い込むほど強く握りしめ、耐える。
何に対する怒りなのか分からなかった。だが最愛の妻が他の男――よりにもよって自分の腹心に甘える姿など、死んでも見たくはなかった。
地獄にでも落とされた方がマシだ。
ぐっと唾を飲み込み、こらえる。

全身が火箸で炙(あぶ)られる心地だった。
嫉妬などという言葉ではまだ生ぬるい。
怒りだ。
猛烈な憤怒が心臓から溶け出し、体中をちりちりと焼き焦がす。
何のためにあの黒竜と戦ったのか。
すべては彼女の為だ。彼女と健やかな人生をこれからも送っていきたい、その一心であの竜を討ち滅ぼしたのだ。
その結果がこれか？
『――げに愉快であろう？』
自分の身体の内側から声が聞こえた。
低い、獰猛(どうもう)な雄の声。
知り合いの声ではなかった。

だがその悪意にみちみちた口ぶりは、記憶の中の邪竜につながった。
一体どこから声を出しているのか。
彼は続けた。
『我の首をいとも簡単に刎(は)ねたのだ。貴様にはそれに見合うものを我が呪いで奪わなければ代償と呼べんだろう？　実に欲の少ない男で初めはどうしようか迷ったが、なぁに。男というものは好いた女の心が離れるだけで、拷問に近い痛みを受けるであろう？　今、貴様の心が嫉妬で荒れ狂っているのを感じるぞ。これぞ愉快(ゆかい)痛快(つうかい)だな』
脳内で高々と哄笑する邪竜に、あの頭をもう一度刎ねてやりたいと心底思った。
何度殺しても殺したりない。
邪竜め、鬼人(オーガ)とてまだ人の心を持っているだろうに。

『ふ、ははっははっ。我を邪竜と呼ぶか。愉いぞ。愉いぞ。実に愉い呼び名だ。気に入った。貴様への呪いもっと長引かせてやる。愛する女に冷たく見放されて、それでもすがり続ける貴様の愚劣を我に見せよ――』

そして声は途絶えた。

しかし黒竜が頭の片隅でじっと自分の一挙手一投足を観察しているのは分かる。こちらのささいな反応ひとつ見逃さず、これからもずっと脳内で自分を嬲り続ける魂胆なのだ。

なんと性根の腐り果てた竜だ！

「ギイ、どうした……？」

心配そうに自分を見つめるベルトランの顔はいつもと変わらない。長年連れ添った乳兄弟のそれだ。

一瞬、嫉妬と怒りで気が狂いかけた心がほどけ、緊張がゆるむ。

けれどその隙を突くように、ベルトランの逞(たくま)しい腕に両手をからめる妻の姿が映った。

「っ！」

混乱する頭に再び妻の冷え切った言葉を浴びせられる。

「放っておきましょう。どうせろくでもないことを考えているのよ。いつもそう。他人を助けることにばかりかまけて、自分のことはおざなり。そういう男でしょ」

妻の声で可憐な唇から放たれる一言ひと言が猛毒だった。

――呪いでそう言わされているだけだ。

頭では理解できても、目に映る彼女の姿が、声が、ギイの理性を炙る。

黒竜を倒すまでずっと自分の心の拠り所にしてきた彼女の存在が、呪いによっていとも簡単に壊されていく。

もう一度、脳内で竜の嗤い声が響きわたった気がした。

◆

「離れて下さいよ。俺はあんたの夫じゃない」

何度そう言ってもアリスはベルトランから離れようとしなかった。手を振り払っても、また腕を絡めてくる。

まるで何年も恋い慕った妻のように振る舞う。

(ふざけるなよ。あいつと結婚しただけでもムカつくのに、俺のオンナ面だと……！？　いい加減にしろこのクソ女)

見ているこっちがまどろっこしくなるほど、親友の恋愛は遅々とした歩みだった。普段の剣技の冴えはどこへ消えたのかと思うほど、のろのろとした交友を彼女と続け数年前ようやっと結婚に至った。晴れやかな日に小さな教会で式を挙げ、手を握るだけで照れる夫の姿は領地でもおしどり夫婦として有名だった。

それがベルトランの仕える主君ヴェルミオン家の頭領夫妻だった。

産まれた頃からずっと一緒だった乳兄弟は二歳年上であることも気にせず、いつだってベルトランを構ってくれた。
俺だけの兄貴分。
幼馴染から親友となり、この関係は永遠に続くものと思っていた。
しかし成長すれば嫌でも理解る。
自分と彼の間に何があるのか――
それは身分の壁だ。
彼は仕えるべき主君であり、俺は彼を支える右腕。
例え領民に分け隔てなく接することが多いのどかなヴェルミオン家であってもそれは変わらない。
先代当主に仕えていた父から厳しく、彼との身分の違いを言葉と体で教えこまれた。
厳しい訓練に音を上げそうになったこともあったが、二歳年上の彼がどんな時も

禿げまい手くれたから、頑張れた。
なにより自らを厳しく律して、他人には優しく生きる彼の姿に男として負けていられないと思った。
どれだけがんばっても彼は先へ行く。
――私は当主だからな。
そう言い張って強者にも媚びず、退かず、たゆまず前進しつづける彼の姿に激しく憧れた。正義を情理でさとす姿は夢物語の騎士そのもので、彼に仕えられる自分は果報者だと思った。
（腹心程度で足りるものか）
どうしたら彼の隣に立つにふさわしい人間になれるだろう。
そう思っていた頃、アリスが現われた。
繊細（せんさい）でたおやかな乙女の姿に、自分の憧れた男はあっという間に魅了された。

彼女への贈り物を事あるごとに自分に相談してきては結果を報告してくる。
プロポーズの言葉さえ一緒に考えてくれと困り顔で頼み込まれた。
あの頃はまだ良かった。
彼の心が腹心である自分にも向けられているとはっきり感じられた。
けれど彼女と結婚してから、彼は彼女と築く家庭にすべて意識が注がれていた。
乳兄弟との友情よりも妻への愛を取ったのだ。
どんな話題を振っても、彼女との生活に帰結してしまう。
そこに友人であり腹心である自分の居場所はない。
俺が憧れた男は、たった一人の女のものになってしまった――
その言いしれない寂しさと嫉妬と苛立ちが、ベルトランの腹の底に澱(おり)となってたまり続けた。
それが今この瞬間(とき)、変質しようとしている。

（なあ見ろよ。俺を見るあいつの視線――）
妻を奪った男として、嫉妬と憎悪にみちみちた目で俺を見ていた。
今この時になって、ようやく彼が自分をひとりの男として認識してくれている。
長年憧れ続けた男が、呪いによって俺を敵として見ている。
ライバルでもなんでもいい。
今まで彼女との家庭に心を囚われていた彼が、どんな形にせよ自分を視界に入れてくれたのだ。
こんなに嬉しいことはない――
（なあ、どうする？）
自分の腕にまとわりつく女の手をそのままにしていれば、ギイが俺を睨む。
けぶるような金髪に青い炎を揺らめかせた瞳が、嫉妬に身を焦がされながら俺を見ていた。
つい唇がにやけてしまう。

女の白い指に手を添わせると、ギイの唇がぴくぴくと震えるのが見えた。
きっとその薄い唇の奥では歯噛みしていることだろう。
けれど理性的な彼のことだ。
この事態が『竜の呪い』であることも分かっている。だから親友を罵倒せぬよう懸命にこらえているのだ。
この程度のことで心を乱してはならないとばかりに冷静であろうとする。
（もっと俺を見ろよ）
彼女の手首をつかめば、アリスが穏やかなほほ笑みをこちらに向けてくる。
彼女の反応すべてに彼が傷ついているのは明白だった。
（あぁ、クソ。俺の憧れた男がこんな顔するなんて……思わないじゃないか！）
自分が今どんな感情でにやけているのか分からなかった。
けれど彼にとって地獄にも等しいこの状況を、腹心である自分は楽しんでいる。
それだけは分かる。

ギイの反応をもっと見ようと、彼に手を伸ばそうとするとくるりと背を向けられた。
「――っ。君も長旅で疲れているのだろう。また明後日にでも話し合おう」
背中を向けた裏側で今彼がどんな顔を浮かべているのだろう。
竜を退治し、富も栄誉も手に入れたはずの英雄が妻ひとり奪われて、どんな屈辱をあの顔に湛(たた)えているのか。
(見てみたい……)
ゾクゾクと背筋を震わすような愉悦に酔いしれながら、呼び止めようとする。
だが俺が振り向かせるより早くギイは応接間を去っていった。
肩を落として去る男の姿に奇妙な色香を感じて仕方がない。
今までに経験したことのない征服欲が満たされていくのが分かる。
(まだだ。まだ、こんなもんじゃ足りない)

彼とアリスが結婚してからの五年間。ずっと顧みられなかった想いが淀(よど)みとなって溜まり、もっと彼に男として見てもらいたいと訴えかけてくる。
(なあ、できることなら死ぬまで続いてくれよ)
そうすれば彼はアリスを見つめることは二度とないだろう。
ずっと俺だけを見てくれるのだ。
これほど悦ばしいことはない。
にやける口許を手で隠しながら、いまだ自分の手にまとわりつく女の手に気がついた。
「ちっ」
大きく舌打ち一つ叩いて、容赦なく引きはがした。

3　竜の助言

まずい。

王宮で与えられた豪奢な自室に戻って早々、ギイは広いベッドに座り込み、頭をかかえた。

最愛の妻があんな風になってしまったのは、今も脳内でけたたましく笑う邪竜のせいだ。

もしも彼を捕まえることができるなら、その首をいくらでもへしおってやりたかった。

『ははっ。いまや民衆に讃えられる英雄とは思えぬやり口だぞ。それは。ギイ・ヴェルミオン』

声だけで分かる。

こいつはこの状況を心から楽しんでいる。
「なぜ貴様が生きている……」
『生きているとはひどいな。貴様に首を断たれてしっかりと死んだぞ。貴様も見ただろう。我の体が大地に沈む姿をな』
確かにそうだ。猛烈な勢いで首から血を噴き、奴の巨体が倒れるのをしっかりと見届けた。
だが、それならばこの声は一体なんだ？
邪竜はギイの思考を読み取ったかのように、さらりと応えた。
『貴様、我を殺した時に血を浴びただろう。服の中までびっしょりと。我の体は血の一滴まで魔素が巡っている。貴様の体内を我が復活の日まで仮の宿にするなど造作もない』
「……なっ」

唖然とさせられた。
せせら笑うように黒竜が続ける。
『あの程度で我が死ぬはずがなかろう。竜を殺すとは血の一滴まで我が魔素を摩滅し、燃やすことだ。人間どもが束になってかかったところで、我をこの地上から完全に抹殺することなど不可能よ。呪うなら貴様ら人間の浅はかさを呪え』
くつくつと竜は嗤いつづける。
『しかし、さっきのは傑作だったな。貴様本当にあの女を愛しているんだな。他の男の手を握らせただけであれほど激昂するとは。いやあ愉快だったぞ。もう一度会いに行かんか』
「――黙れ。痴れ者めっ」
ベッドを乱暴に叩いても声は消えない。脳裏に木霊する嘲笑が大きくなるだけだ。

思い返しただけでも腸（はらわた）が煮えくりかえる。
それに、ベルトランもベルトランだ。
どうして彼は彼女を突き放さなかった！
およそ人々を救った英雄とは思えぬエゴに満ちた考えばかり浮かぶ。
――いいや、彼はかけがえのない親友だ。今日この時までずっと自分に尽くしてきてくれた忠義厚い腹心ではないか。彼を責めるのは間違っている。
理性的な考えがよぎるが、それを竜が打ち消そうとする。
『……親友、ねえ。貴様の妻に言い寄られても、体を引かなかった男を親友と呼べるのか？』
「貴様はベルトランを知らないだろう！　彼は王都の騎士団に入れるほど優秀だったのに、私なんぞのために辺境の地に残ってくれたのだ。彼ほど忠義に厚い男がいるものか」

そうだ。
どんな時でも彼は私の隣に立ち、支えてくれた。地位も権力も持つ高位貴族に騎士として迎えると誘われても全て断った男だ。
領土が脅かされた時も必ず一番に駆けつけてくれて、共に戦ってくれた。
彼ほどすばらしい友人はいない。
そう思うのに、数分前の光景が目に焼きついて離れない。
『――ならば一つ貴様にチャンスを授けてやろう』
みるからにうさんくさい申し出だった。
ギイは眉間に深いシワを刻んで、即答した。
「断る。貴様からの施しなど受けぬ」
『本当にいいのか？　我は貴様の妻の呪いをといてやっても良いと言っているのだぞ』
「っ」

その提案はあまりに魅力的で、一瞬で飛びつきたくなった。
なにせこの呪いを解けば、彼女が、最愛の妻アリスが再び自分を優しく見つめて、愛を囁いてくれる。あんな冷たい眼差しではなく愛情溢れるほほ笑みを湛えてくれるのだ。
邪竜の提案に乗らないわけがない。
今回の戦いだって彼女のことだ、とても心配してくれたに違いない。正気に戻ればあの小動物を思わせる細い体を揺らして、駆け寄って来るに違いない。
そうすれば――この広い寝室で甘い時間を彼女と過ごせる。
数年前に結婚したというのに、いまだ新婚夫婦だと領民たちから良くからかわれる、あのささやかな時間を取り戻せるのなら――
ギイは苦悶（くもん）の表情で自分の拳を握りしめた。手のひらに爪が食い込み、見る見るうちに鬱血（うっけつ）の跡ができあがる。

唇をきつく噛みしめ、がらんどうの寝室を眺めた。
人々から多くの喝采を浴びたはずなのに、本当に欲しいものは、手元にない。
慟哭(どうこく)と悲憤にのたうちまわること数分、ギイは邪竜に尋ねた。
「――どうすれば取り戻せる？」
邪竜は喉を震わせながら嗤って答えた。
『それほどあの女が欲しいか。無欲な奴と思っていたが、貴様も存外人間くさいところがあるのだな』
「いいからさっさと教えろ！」
これ以上彼女と親友を貶(おとし)めるような言葉を思い浮かべたくない。
口にしたくもないのだ。
『ふぅむ。なら教えてやる。その方法とは――』

4　夜の訪問

深夜。

白く美しい満月が王宮の尖塔にかかろうとしているのが中庭から良く見えた。

城下町からは夜を徹しての祝祭がまだやんでいないようで、晴れやかなメロディが風に乗って聞こえてきていた。

淡い月光に照らされた中庭には、白い薔薇のつぼみが並んでいた。明日にでも花ひらくであろうつぼみを見つめながら、ギイは回廊を足早に渡る。

脳内では今も奴の嗤い声が響いていた。

『いやあ実に愉快な夜だ。そう思わないか？　ギイ・ヴェルミオン』

(黙れ。私の名前を勝手に呼ぶな)

そう呼んでいい人間は数える限りしかいない。

最愛の妻アリスと、腹心のベルトラン。そして故郷で帰りを待ってくれている両親。

こんなたやすく邪竜に呼ばれるいわれなどない。

しかし心中つぶやいた声はしっかりと邪竜に届いていた。

『つれないな。体じゅうに我の血を浴びた仲ではないか』

(誰が好きこのんで貴様の血など浴びるものか……!)

もう何度目になるかも分からない罵声を、脳内にいついた邪竜に浴びせながら、ギイは侍従に教えてもらったベルトランの部屋へと向かっていた。

(こんなやり方で本当に呪いがとけるのか……?)

疑問はつきない。

邪竜が教えてきた方法は彼がかけた呪い同様、『悪意』に充ち満ちていた。

今日だけでこの邪竜を何回くびり殺してやりたいと思ったか。

それでも奴が教えた方法で呪いがとければ、アリスが自分の元に戻ってくる。

あの儚げで繊細な微笑みを再び自分に向けてくれる。それだけであの決戦の疲れも報われるというものだった。

ちらりとギイは左手の薬指にはめた指輪を見た。

それほど高くはないが、領内で一番の職人に作ってもらった揃いの結婚指輪だ。

シンプルな銀の指輪の台座には小ぶりのルビーがはめ込まれている代物だった。

真朱の騎士と名高いヴェルミオン家ではルビーこそ最上の宝とされていた。

父はこのルビーに似合う真っ赤な赤毛だった。

できれば父のような赤毛に生まれつきたかったが、あいにくと金髪碧眼の母方の血が濃い自分には難しかった。

幼い頃は髪を赤く染めようと思ったほどだ。

だからこの真っ赤な宝石が似合わない外見は昔からコンプレックスだった。

それでも今はこの指輪だけが彼女との唯一の絆だった。

（アリスだって今もまだ嵌（は）めてくれているはずだ……）
彼女の笑顔が取り戻せるのなら、どんな方法だってやり通すつもりだった。
例えそれが身の毛もよだつやり方であっても――
夜の回廊にひとけはなかった。
王侯貴族達は今夜も大広間で宴を張っているのだろう。
（その方がいい。誰にも見られずに済む……）
鎧を脱ぎ、群青のガウンを身に纏った軽装で、ベルトランの部屋の前にたどりついた。
（私を見守っていてくれ。アリス）
薬指の指輪に接吻をひとつ落とし、深く息を吸い込むと緊張した面持ちで扉をノックした。
「ギイか。どうした」

さりげなく彼の部屋を目で追ってしまう己がいやだった。
アリスが来ていないかつい確認してしまう。
（なんてはしたない……）
ベルトランの言葉には答えぬままギイは不作法（ぶさほう）と思いながらも、部屋に入り込んだ。
背後からベルトランの困惑ぶりが伝わってくる。
（言え。言うんだ……さっさとこんな事終わらせてやる……）
深呼吸を繰り返すこと三回、親友に向き直った。
焦げ茶の髪に無精髭が目立つ三十路（みそじ）直前の乳兄弟。
体毛の薄い自分と違い、年齢に見合った男ぶりが備わった男だった。
「っ。呪いをとく方法が、その、神殿からの啓示が来て分かった」
邪竜からの指示などと言えるはずもない。

ありもしない啓示をでっちあげて親友に嘘をつくなど、生まれて初めてのことだった。
それだけに心臓がばくばくと大きな音を立てる。
「それで……その……、方法なんだが――」
あと一歩、勇気をふりしぼればきっとベルトランは応えてくれる。
そう思うのに、唇がわなないて次の言葉を続けてくれない。
そもそも長年支えてきてくれた彼に、こんな申し出をすること自体失礼ではないか？
『なんだ親友に言うのがそんなに嫌か？　なら我が手伝ってやる』
言うなり勝手に舌が動き、唇から音が発された。
（待て。待ってくれ――！）
心の中の制止は間に合わない。
「私を抱いてほしい」

言葉はすべり落ちて、しっかりとベルトランの耳に届いてしまっていた。
「ぁ……あ……」
とっさに口許を隠す。そうすれば発した言葉を取り戻せる気がした――
けれど現実は甘くなかった。
「へえ……そりゃいいことを聞いた」
「……ぇ……？」
はじめは自分の耳を疑った。
だってそうだろう？　ベルトランがそんな返事をするはずがない。
彼はいつだって信頼できる友であり、ともに戦ってくれる忠義厚い腹心だったんだから。
だからこんな面白がるような返事をするはずがなかった。
ギイはおそるおそる顔を上げた。
そこには満更でもないという顔のベルトランが立っていた。

（う、そだ……！）
足が自然と後ずさり、彼から距離をおこうとしたが、それより早く詰め寄られた。
鼻息がかかるほどの近さについぞ生まれたことの無い緊張が生じた。
（否定、そうだ。否定しなくては……）
今のは邪竜に言わされただけで本意ではない。あくまで今夜の申し出は妻を取り戻すためだと。
だから彼に抱かれるのだ――
その事実にギイは自分の胃がきゅっと縮みあがるような恐怖を感じた。
部屋を訪れる前にさんざん覚悟した気構えはうすっぺらい紙のように吹き飛び、なんの助けにもならない。
「違う、今のは……」
否定しようにも、一度口に出した言葉は取り消せなかった。
腰をなでられ、尻をつかまれる。

大きな手のひらで尻の形が変わるほど大きく持ち上げられ、尻の割れ目を指でなぞられた。
「ッ」
声にならない悲鳴が漏れる。そこへベルトランの声が覆いかぶさってくる。
「イイな。今の声、もっと聞かせろよ」
口許を手で覆い隠し、声を殺す。
ただ抱いてくれればいいのだ。こんな言葉のやり取りはいらない。
頭を勢いよく振って拒否を示すと、ベルトランが鼻を鳴らした。
「じゃあお前の声を聞かせてくれるまでずっとセックスするか？」
「ッ……そんなことより……手早く済ませてくれっ！　お前は私を抱いてくれれば、それでいい！」
いつものように言うことを聞いてくれればいいのに、なぜか今夜の彼は違う。
（まさかこれも呪いの影響なのか？）

『聞きたいか？』
気軽に邪竜の声が返ってくる。さっさと教えろとせっついたが、この性悪な竜が素直に答えるはずもない。
『我のことを邪竜などと呼ぶ輩にどうして答える必要がある？　答えを得たいなら相応の態度というものがあろう』
くつくつと面白がる笑い声が響いた。
本当にイヤな奴だ。
殺したのは間違いではなかったと心の底からそう思える。
『我の首を断ったことをこれほど後悔しない人間がいるとはな。ほれ、親友にたらふく犯してもらえ』
その言葉が終わるとと同時にベルトランに左手を掴まれた。
赤い舌が伸びてきて、薬指をしゃぶられる。長い舌であっという間に彼女との結婚指輪を唾液で穢された。

「――ッ、ベルトラン！」
たとえ忠義厚い腹心でも今の行動は見過ごせなかった。
「指輪から離れろ……ッ！」
けれど彼の舌は蛇のように指に絡まって離れない。
ちゅぱ♡ちゅぱ♡ちゅぅぅぅ♡♡
にちにちとイヤらしい水音を立てて、何度も指輪を舐めまわした。
そしてベルトランがニヤリと笑った。
「これから俺のモノになるんだから、あの女との繋がりはしっかり潰しておかないとな」
「貴様ッ！」
かつてないほどに殺意が沸いた。
彼女との繋がりをこんな風に穢されたことは初めての経験だった。
体の内側からふつふつと怒りが湧いてくる。

けれどかろうじて残った理性が、彼も呪いの余波を受けているだけだ……と押しとどめてくる。

もしも呪いを受けているのなら、ここで彼を叱責するのは間違っている。

「俺に抱かれたいんだろ。嫌なら、あの女はあのままだぜ。それとも最愛の妻を親友に寝盗られるのが趣味か？」

俺はどっちでもいいぜ、とベルトランがのたまう。

言葉にならない葛藤が生じた。

いまや唾棄すべき男に成り下がった親友に抱かれるか、それとも彼女を本当に喪うか。

瞼の裏に自分にほほ笑みかける彼女の顔が浮かんだ。

（――アリス……！）

取り戻すべきは彼女だ。その為なら私はどうなってもいい。

たとえ彼女の前に堂々と立てなくなっても。

『まこと麗しい無償の愛だな。だがそういうものほど我も穢したくなる』
次の瞬間、尻の奥で鞭がしなるように何かがぷっくりとふくらんだ。
それはみるみるうちに小石ほどの大きさとなって、前立腺を叩いた。
「ア……ゃ……ァ、っ」
執拗に前立腺をこづき、なめしゃぶり、吸いついてくる。
（なん、だ……コレ……っ……感じて、しまう……ッ♡）
むくむくと竿が反応して勃起しはじめる。当然身体を密着させたベルトランにもそれは伝わった。
「へー、妻を寝盗られるって言葉に反応したのか？　この膨らんでるの、お前のおちんちんだよな」
「違――ッ！　ソレは、その……！」
弁明しようとするが、前立腺にくっついた何かに再び阻まれる。
ぢゅるるる♡♡♡ちゅぽん♡

音を立てて吸いつかれ、離れたかと思えば膨らみきった前立腺を容赦なく押しつぶされ、しつこく勃起を促される。
（い、やだ……こんな、の、ベルトランにバレてしま――ヒ、んッ♡）
「なんだ俺に抱かれる気満々だったのか。じゃあ服ひん剥いてもいいよな」
ガウンの帯を引き抜かれ、薄い寝間着があらわになる。
股間はしっかりと盛り上がり、ズボンにはうっすらと小さなシミを作っていた。
「ッ、見るな！」
股間を隠そうとしたが、ベルトランが足のあいだに膝を割り込ませてきた。
強引に足を開かされ、閉じられない。
「英雄さまはオシッコ漏らしちゃったか、見てやろうか」
「――結構、だっ！」
ズボンを下着ごと引きずり下ろされた。
完全に勃起した性器が現れ、透明な先走りがぽたぽたと亀頭から竿へと垂れてい

た。
「カワイイおちんちんじゃないか。俺がもっと大きくしてやるよ」
言うなり睾丸を手で揉まれる。
ベルトランの指が自分の漏らした液体で濡れていく。
「揉むとでっかくなるから、英雄さまはベッドで奥さまを満足させたいなら、まずは俺くらいでっかくならないとな」
そう言ってベルトランは自分のズボンを下ろした。そこから現れたのはひと回り、いやふた回りは大きい巨根だった。
隆々（りゅうりゅう）とそびえ立ち、使い込まれているのか竿の色も私より濃かった。長い竿には凶悪な筋が浮かび、精子がたっぷりとつまった睾丸がぶらぶらと揺れていた。
もともと体毛が濃いせいか、根元には髪と同じ色合いの陰毛が密林のごとく茂っている。

むわりと彼の雄としての体臭が漂ってきて、つい後ずさってしまう。
「ほら握ってみろよ」
左手で彼の竿をむりやり掴まされる。むくりと反応した巨根につい指が震えてしまう。
「シゴいた事くらいはあるだろ。こうやって親指と人差し指で輪っかを作って、先っちょまですべらせるんだよ」
言われるがままベルトランの竿をシゴくと、薬指にはめた結婚指輪が嫌でも目に入った。
「ゃ……だめ、」
台座にはめられたルビーがまるで彼女の目のように自分を見ている。
その事実に背中がぞくりとして、足元から背徳感と申し訳なさとが這い上がってくる。
「お前の結婚指輪が俺のチンコにコツコツ当たるの、気持ちいいよな」

分かっていて……！

ベルトランを睨むがその意志を挫くように、再び体内で何かが暴れた。

前立腺のまわりの肉ひだもしゃぶられ、イケと命じられる。

（い、やだ……ッ♡　ベルトランに見られ、るッ！　絶対に……やだっ）

腰を引こうとするがすぐに抱き寄せられてしまう。

「なんだ。英雄さまも部下のモノをシゴいただけでイキたくなってんのか？　腰、揺れてるぞ」

指摘されて動きを止めようとするが、そのたびに体内で暴れ回るモノが許さない。

コツン♡コツン♡ちゅぱちゅぱ♡ちゅぅぅぅ♡♡

狭いはずの尻穴を強引に広げさせられ、その間もずっと前立腺をいじられ、ほじくられる。

（もぉ、やめ――ッ♡）

我慢できずに射精する。
ぴゅるる♡♡
薄い精液が自らの先っぽから噴き出し、左手にかかる。
結婚指輪は自分の出した精液でどっぷりと白く汚れれていた。
「うわ。シゴかなくてもイクとか相当ためこんでたな。それとも……俺に抱かれたくて準備してきたのか？」
ケツを軽く叩かれる。
その瞬間、体内をむしばんでいた何かが尻穴から抜け落ちた。
黒い、邪竜のウロコを思わせるような代物だった。それは床に落ちてもうねうねと動き続けていた。
「へぇ。お前が黒スライムを身体に仕込んでやってくるとはね。本当に俺に抱かれたいワケだ」
（違う！　こんなモノ身体に入れた覚えもない！）

あるとすれば――

（まさか奴の血が……体内にまで侵入して……？）

『そう怖がるな。貴様は頭から我の血をたっぷり浴びたかのだ。我の血を貴様の体内に潜らせることなど造作もない。それに一つと言わず二つ三つとあるぞ。存分に楽しめ』

言われた瞬間、再び体内にさっきの感触が生まれ前立腺に吸いつかれる。今度は二つの方向から交互にしゃぶられ、引っ張られた。

「ひ、ンんッ……ッ♡♡」

「お盛んだねぇ。もう立っちまってるぞ。そんなに待ちきれなかったか？」

「ち、がぅ……！　誰がお前なんかと……ッ」

「ちんちん勃起させて言うセリフじゃねぇよな」

に、ちゅぅ♡にゅるぽぉ♡

完全に立ち上がった巨根をへその下にくっつけられて、足がガタガタとみっとも

なく震えた。
「おぅおぅ、俺のチンポに吸い付きたくて、みっともなく腰ふって可愛いでちゅね〜。英雄さまのおちんちん」
「だ、まれ……ッ♡　こんなのは、生理現象で……ッ♡　ッ♡　……は、ァ……ゃ、だめ、またイっちゃ――！」
体内のウロコがスライムみたいに蠢き、尻穴の肉ひだを一枚一枚めくりあげるようにしゃぶりついてくる。
体液が泡立つまで嬲られて、立っていられない。
気づけばベルトランの胸にもたれかかるようにして、射精していた。
ぴゅる♡ぴゅるる♡♡
「可愛らしい音立てちゃってまあ。こんなもの仕込んで来る位だから、実はもうお前、ケツの穴をアリスに仕込まれてるのか？」
「彼女は、……そんな、こと、しない……っ」

息も絶え絶えに反論すると、きつく抱き寄せられた。嫌でも互いの腹に挟まれたベルトランの竿を感じる。
「じゃあお前のお腹で俺のチンコはさんでもらって、俺のオナホにしてもいいよな？」
「あ……ぇ？」
聞いたことも無い単語に反応が一歩遅れた。向き合った状態で腰を両手で軽く持ち上げられる。ずりずりとベルトランの巨根を何度もへその下にすべらされる。
にちゅう♡ちゅ♡ちゅ♡ちゅぷぷぷぷ♡♡
亀頭がへその浅い穴にひっかかり、おなか全体で彼の巨根を包み込まされる。
「や、いやぁぁぁぁ♡　ベルトラン、下ろせ。下ろせったら――ヒんッ♡♡」
腰を左右に揺さぶられ、満遍なく下腹の腹筋に彼の熱い肉棒が転がされる。
徐々に太い肉竿が盛り上がり、一度射精して萎えた性器に彼の睾丸を何度も打ちつけられた。

「オナホってのは、男が精子ぶちまける為のいれ物の事だ。俺に抱かれるお前にはお似合いの名前だろ？」
「ゃ、あッ♡　そんな、ことない……ッ♡　から、おなか熱ぃ……ぃ♡」
「とりあえず一発目出してやるからなっ♡」
頬にキスされ、鎖骨や胸元にもキスの雨を降らされた。
そのまま上下に揺さぶられていた身体を両手できつくだきしめられた。
その瞬間、へそ近くから信じがたい音と熱い液体が噴き出した。
びゅろろるろろろ♡♡♡
互いの腹を濡らし、密着した腹部から白く濁った液体が漏れて、床に飛び散った。
射精しているあいだもずっとベルトランの巨根は熱く脈打っていて、ギイの薄い腹を軽く叩いてきた。
ようやくベルトランが満足げな息をついて身体を離すと、互いの腹に出された精液がべっとりと垂れて、白い橋を架ける。

「乳首まで濡らしてやりたかったけど、まだまだ時間はあるもんな」
太い腕に抱き上げられる。不安定な状態につい彼の肩に手をまわしてバランスを取ってしまう。
床に落ちたガウンは彼の精液にまみれていて、ひどい有り様だった。
（こんな女みたいな格好……ッ）
たまに戦いの合間に連れてこられた娼婦が、シャツ一枚の格好で歩いていたのを見た覚えがある。
今の自分はそれとまったく同じ姿だった。
ズボンも下着もおろされ、唯一残っているのは薄い上着のみ。
あまりの心もとなさにシャツの襟をかき寄せる。
「心配するなよ。記憶吹き飛ぶくらい犯してやるから」
そう言って下ろされた場所は彼のベッドだった。

5　他の男の名前

にゅぷぷぷ♡

空気を孕みながら尿道に入ってくるモノの音にギイの背中は自然とこわばった。

（さっさと抱けと言ったのに、どぉしてこ、ンな――ッ）

ベルトランの膝に座らされ、彼の厚い胸板に背中を預けるような状態だった。

振り向けばすぐそこに腹心がいる。

今までにもこうした近さで喋ることはあったが、互いに半裸の状態は初めてだった。

しかも尻には今もベルトランの硬い怒張を押し付けられている。

（あんなに出したのに、なんでもう元気なんだ？）

おかしいだろう。

子供サイズのちんちんは今もベルトランの指にもてあそばれている。
こよりみたいに細く頼りない棒をローションでたっぷり濡らし、それをちんちんの先っちょにある尿道へ入れられる。
あらぬ場所に異物を挿入され、全身が緊張を訴える。
ベルトランは気持ちよくさせると言ったが、こんな事で気持ちよくなるとは到底思えな――？！
くぷん♡くぷぷっ♡にちっ♡にちっ♡
尿道に入ったこよりをくるりと回転させられた。
その瞬間目もくらむような衝撃が襲いかかり、腰から下がどろどろに溶けるような快楽を流し込まれた。
快楽は途絶えることなく続き、ギイの竿の奥に逆流してくる。
「ゃ♡　ァ♡　ぁ♡　だ……め、ソコッ……奥、これ以上はい、るな――ァ、ヒンッ♡♡」

イキたい。けど精液を噴き出す場所はふさがれている。
たかだか一本の細いこよりに――
ベルトランの手にふれて止めようとするたび、彼はこよりをクリクリと回して邪魔してくる。
そのたびに下半身が熱くなり、吐き出す先を失った性欲が体内で暴れ回った。
「この奥で男の精子は作られてるんだよ。英雄さまの精子を欲しがる女はお前が結婚してても、たんまりいるんだろうな」
そこでベルトランは言葉を切った。
尻にくっつけていた太竿をぶらぶらと揺らしてくる。
その動きに自分はもう彼の手の内なのだと思い知らされる。
（い、やだ。誰が、こんな屈し方……ッ♡）
歯を食いしばって耐えようとするが、尿道をいじられ蕩けきった身体は問答無用だった。

もう射精なぞしてる暇はないとばかりに、解放先を求めて尻穴が何度もひくついてしまう。
「お。イイ反応。やっぱりお前、男に抱かれる才能があるな。なにせこんなモノ、ケツ穴に仕込んで俺の部屋に来るくらいだもんな」
ベッドの隅に置かれていた邪竜のウロコを手に取る。
それはギイの体液まみれで、今もランプの光を受けて艶めかしく輝いていた。
「お前が黒スライムを知ってたなんてなあ。さすがの俺も幻滅したぜ」
「言ってろ……！」
どうにかしてこの場を凌ぎ切ろうとした瞬間、後ろから腰をほんの少し浮かされた。
「は、……え……？」
一体なにを？
そう思った瞬間、尻の割れ目にベルトランの竿を打ち付けられた。

ぺちん♡ぺちん♡ぺちゅん♡
太い肉竿が尻穴のすぐそばまで来ている。ほんの少し身体をずらすだけでソレは体内に入れるのだ。
あと少し――
身体をずらすだけで彼に犯される――
その予感に、ギイはイった。
びゅるるるる♡
精液は出ていないのに、なぜか体内で精子をぶちまける音が聞こえる。
「ゃ――アアぁ♡　な、にこれ！　だめ、出るなァァ♡　出るなったら――アァァぁァァァ♡」
一滴も出ていないのに、気持ちがいい。
尻に男の肉棒を打ちつけられたまま、ギイのメスイキは続いた。
「おーおー。ケツ穴広げちゃってカワイイ♡　くぱくぱしてるぜ。英雄さまのアナ

ル」
ベルトランの手が片方、はくはくと物欲しそうに広がる尻穴の入口にふれてきた。
「嬉しそうに喜んでるから、ご褒美やるよ」
く――ぱぁぁ♡♡
すぼめては広げる動作を繰り返していた穴を太い指で大きく開かされる。
すると下の口を閉じられなくなったせいで、メスイキが止まらなくなった。
「やぁァぁぁぁ♡　指、どけろ――ぉっ♡♡」
「どうして？」
「ぁ、う、くっ♡♡　そんなの決まって――ひんッ♡」
「英雄さまのお口からハッキリ、分かりやすく言ってもらわないと分かんないなあ」
全部分かっているクセに！
昔からベルトランは時々イジワルな態度をとることがあった。
それがまさかこんな時に発揮されるとは思わなかった。

ハッキリと伝えるということは、彼の指が今自分の身体のどこをさわっているか声に出すということだ。

他人に、しかも腹心の彼に言葉でねだるなどできるはずもない。口にするだけでも恥ずかしかった。

（こんなお願い、誰が、言うものかっ！）

絶対に言わない。

そう視線で告げるとベルトランは予想していたのか、ニンマリと笑った。

「言えないならこのまんまだぜ。セックスの経験が乏しい英雄さまはいつまで耐えられるかな」

うるさい。

なんと言おうと耐えてみせる……！

『実に強情な男だな。ソコが魅力でもあるんだろうが……なぁに、もっと気持ちよくなりたいのであろう。我も手伝ってやる』

邪竜の言葉が脳に響いた瞬間、尻穴の奥――前立腺を再びしゃぶられた。
（や、ァ♡　こんな、タイミングで、前と後ろ、両方責められたら……ッ♡）
『我はあの男より優しいからな。我の名前を呼べば止めてやる』
（名前だと……？）
邪竜に呼び名があったなど聞いたことがない。討伐前に調べた文献ではどれも竜や災いといった抽象的な名称ばかりだった。
『人間どもが勝手につけた名だが我は気に入っている。貴様らの古い言葉で大いなる悪という。――ヴォルだ』
それを呼べと言うのか。
『ああ、呼べばきっと更に楽しいことが待っているぞ』
邪竜の言う楽しいことが本当に楽しいかは疑わしい。そもそも妻にあんな呪いをかけた奴だ。十中八九ろくでもないことに決まっている。
『ふむ。我の予言をろくでもないことと決めつけるのはいかがなものか。良かろう。

我のウロコの数を増やしてやる。もっと快楽の海に沈め』
次の瞬間、前立腺にしゃぶるモノの数が増えた。
「いやぁ！　いやぁぁぁぁ♡　イク！　イキたいから……たのむッ♡　こんなの、もぉ……耐えられない……、……ッ」
ベルトランの顔が喜色満面に染まる。
その顔を視界に入れたまま、邪竜の名を呼んだ。
「……頼む……ッ♡　……ヴォル……ッ♡」
口にした瞬間、前立腺をしゃぶられたままつねられ、途方もない快感にさらわれた。
びゅくくくくく♡♡
イヤらしい音がずっと頭のなかで鳴り響き、全身のいたるところを快楽に染め上げる。
無意識に腰を振り、ヴォルが愉悦に満ちたけたたましい笑い声を上げる。

（もぉ……、……収まれ……頼む、から……ッ♡　ァ、ァ、やァ♡　気持ちよすぎる……ッ♡　また、イク♡♡　出ちゃうぅぅぅぅぅ♡♡）
ぴゅぅぅぅ♡ぴゅ♡ぴゅ♡ぴゅぅ♡♡
ようやっとメスイキが収まった頃には恍惚としたまま寝室の天井を見つめていた。
身体はくたくただ。もう一滴も出せない。
息も絶え絶えにそっと後ろを振り向くと、じっと自分を見つめるベルトランに出くわした。
その視線にはもう先程のからかってくる雰囲気はない。
瞳の奥で何かがふつふつと煮えたぎっている。
「――ベルトラン……？」
どうしてそんな顔をしているんだ？
小首を傾げて尋ねた瞬間、唇を荒々しく奪われた。
「ッ♡　ベルトラン！　やめろッ♡　ンんッ♡」

肉厚な舌が口の中を蹂躙（じゅうりん）する。歯の形をべろでなぞり、頬の裏側をなめしゃぶり、しまいには舌をキツく吸い上げてくる。

（こんなキス、アリスとも交わしたことがないのに……ッ）

腹心の身体を押し返そうとするが、長時間メスイキさせられた身体に力は残っていなかった。

そのまま仰向けでベッドに押し倒される。

「なあ、ヴォルって誰だ？　男だよな」

「え……ぁ……」

どう答えればいいか悩んでいるうちに反論の機会は閉ざされた。

「俺以外の男にもう抱かれてたから、経験があったから、簡単に自分の身体を差し出せたのか？　はっ。そうだよな。じゃなきゃ処女のお前がこんなモノ、ケツに仕込んでやってくるはずないもんな。とんだ英雄さまだよ。もう他の男に抱かれてた

とは」
ベルトランがやけくそ気味に笑う。目元を片手で覆い、深いため息をこぼした。
「あーぁ。あんたの初めての男になれると思って舞い上がってた俺がバカみたいだよな」
「ベルトラン、それは違う。今のは……その、」
彼と視線を交わすこともできない。
今までならいつだって目を見れば全て彼の考えや気持ちが分かった。
けれど親友に見向きもされないというのは初めての経験だった。
ようやっと見えたベルトランの顔は別人のようにひえびえとしていた。
両手を捕まれ、のしかかられる。
「あんたの初めての男になれないなら、もう気持ちよくさせる必要もないよな」
長年の付き合いの親友に身体の自由を奪われる。ゾワゾワとした恐怖が足元から這い上がってくる。

ベルトランの瞳からはもう親愛も敬愛の光も消えていた。
ただ、ちょうど良く目の前にやってきた獲物をなぶる暴力の気配だけがある。
乱暴に両足を開かされ、ベルトランの肩に乗せられた。
「やめ――下ろせ！」
自分の股間が彼に丸見えの状態が恥ずかしくて手で隠そうとすると、尻穴に彼の怒張を突きつけられた。
先走りでじっとりと濡れた亀頭がメスイキを覚えたばかりの穴にあてがわれる。
「俺の形をあんたが覚えるまで犯してやる」
「待っ――！」
ぐ、ぷぷぷぷ♡♡
間髪入れずにあの巨根が体内に入ってきた。肉ひだを乱暴にめくりあげ、先走りを塗りつけてくる。
「や、いやぁァ――ッ！」

どれだけ悲鳴をあげてもベルトランは抜いてくれなかった。
「それじゃあお望み通り抱いてやるよ。英雄さま」